「台湾二二八事件と中央大学卒業生」プロジェクトと受難者家族の証言概要[1)]

松　野　良　一

The Project “228 Incident in Taiwan and the Chuo Graduates” and Outlines of Testimonies of the Victims’ Family

Ryoichi MATSUNO

Abstract

The Taipei 228 Memorial Museum was originally a radio station called the “Taipei Broadcasting Corporation” in prewar times. During the 228 Incident, civilians occupied this building and used it to broadcast rallying cries around Taiwan. I visited this museum in September 2012 on unrelated research. There, I noticed a Chuo University cap on display. What relationship did Chuo University have with the 228 Incident? Actually, among those who were executed or went missing during the 228 Incident, there were many Taiwanese elites who had studied at Japanese universities. People who had studied at not only Chuo University but also the University of Tokyo, Waseda University, Nihon University, and other universities, and became lawyers and doctors on their return to Taiwan, were executed as dissidents who were deemed to have been poisoned by Japanese imperialistic education. After seeing the cap, me and my students started the project, the “228 Incident in Taiwan and the Chuo Graduates”; we gathered testimonies from eight victims’ families. This article outlines the testimonies and shows the attitudinal changes of students who engaged in the project. Almost all of the students acquired new perspectives on Japanese–Taiwanese historical issues and meanings and agree that there is a good reason why most Taiwanese are pro-Japanese.

Key Words

228 Incident in Taiwan, The Taipei 228 Memorial Museum, Chuo Graduates, Taiwanese Elites, Outlines of Testimonies, Attitudinal Changes of Students

目　　次

1.　調査研究の目的
2.　調査のきっかけ
3.　台湾二二八事件とは何か
4.　調査研究の方法
5.　聞き取り調査（取材）とスケジュール
　5.1　受難者および調査対象者リスト
　5.2　調査（取材）スケジュール
6.　調 査 結 果

6.1　林連宗に関する調査結果
6.2　李瑞漢に関する調査結果
6.3　李瑞峰に関する調査結果
6.4　湯徳章に関する調査結果
6.5　陳金能に関する調査結果
6.6　王清佐に関する調査結果
6.7　張旭昇に関する調査結果
6.8　王金星に関する調査結果
7.　調査学生の感想と総括
7.1　調査学生の感想
7.2　プロジェクトの総括
参 考 文 献

1.　調査研究の目的

日本敗戦後，日本人は台湾から一斉に帰国した．台湾総督府の財産を接収したのは，蒋介石率いる中国国民党であった．しかし，その国民党の政策はひどく，賄賂は横行し，物資の中国大陸への横流しで大規模なインフレが発生した．台湾人たちは，「犬が去って，豚が来た」と国民党を揶揄した．日本人はうるさいが番犬になった．しかし，国民党は豚のようにむさぼり食うだけで役に立たないという意味だ．そして，1947年２月28日に，不満は爆発し台湾全土の暴動へと発展した．台湾二二八事件である．

この暴動を弾圧するために，蒋介石は中国大陸から軍隊を派遣し，無差別の虐殺を行った．その受難者の中に，日本の大学に内地留学し，台湾で弁護士や医師として活躍していた人が多くいた．中央大学卒業生の多くも，同事件に巻き込まれた．その数は調査で判明しただけで，10人以上に上っている．本調査研究は，台湾二二八事件の受難者について，中央大学卒業生に絞って，その受難者家族の証言記録を試みたものである．それも，聞き取り調査に当たったのは，大学の後輩である学部学生である．戦争のことも，台湾二二八事件のことも全く知らない学部学生が，体当たりで調査を進め，等身大のルポルタージュを書いた．最終的には，中央評論という雑誌に特集「台湾二二八事件と中央大学卒業生」として掲載された．学生たちは，プロジェクトの前後で，どう変化したのだろうか．

日本で発行されている台湾二二八事件に関連する資料や台湾史には，事件の全体像や歴史的な事実関係が記載されたものはある．しかし，同事件に巻き込まれた受難者家族の体験・当時の心境に関する証言については，まとまったものはない．さらに，歴史的事実を知らない若者たちに読んでもらうことを想定した書籍はない．受難者家族の証言を記録することで，当時を生き抜いた人々の話を聴き，受難者家族の体験と当時の心境を知ることは，「台湾二二八事件」を知る上で極めて重要であると考えた．

本稿の目的は，２つある．１つ目は，台湾二二八事件で受難した中央大学卒業生の家族の証言を記録すること[2)]．２つ目は，証言記録とルポルタージュ執筆を行った中央大学の学部生が調査活動によって何を学んだかを考察することである[3)]．

2.　調査のきっかけ

筆者は2012年９月に，台北二二八紀念館において，中央大学の学生帽が展示してあるのを見つけた．そして，「台湾二二八事件と中央大学にはどのような関係があるのか」という素朴な疑問をもった．この学生帽の持ち主を探すと同時に，同事件と中大の関係について調査を思い立った．その後調査を進める中で，戦前，戦中に中央大学で学

写真１　林蓮宗氏の学生帽＝台北二二八紀念館で．（2011年９月筆者撮影）．

んだ台湾人たちが数多くいたことがわかった．さらに，中央大学に限らず，日本の大学で学んだ多くの知識人が，台湾二二八事件とそれ以降の戒厳令下における恐怖政治によって，行方不明または殺されていることが判明した．

学生帽の持ち主探しは難航したが，ネット上で検索作業を繰り返すうちに，受難者家族と交流がある日本人研究者が見つかった．交流があるのは本学経済学部の中川洋一郎教授．そのご縁で，中大出身の弁護士で犠牲となった李瑞漢氏の長男，李榮昌さん（取材時，80歳）を紹介していただいた．そして，学生帽の提供者が，林信貞さん（取材時，82歳）であることがわかり，学生帽は彼女の父親・林連宗氏のものであることが判明した．その後，台湾の二二八事件遺族団体や台北二二八紀念館などの協力を得て，インタビュー調査を進めることができた．

3.　台湾二二八事件とは何か

まず，台湾二二八事件についてレビューしておきたい．1945年８月15日，日本政府は連合国が示したポツダム宣言を受諾し，無条件降伏した．９月２日には戦艦ミズーリ号上で降伏文書の調印式が行われ，連合国軍総司令部（GHQ）は日本に対し一般命令第一号を出した．そのＩのＡ項は「中国（満州を除く），台湾および北緯一六度以北の仏領インドシナにある日本国の先任指揮官，ならびに一切の陸上，海上，航空および補助隊は蔣介石総統に降伏すべし」と日本に命じた．当時の台湾の人々はこれを祖国への復帰「光復」として喜び，中国国民党の軍隊を歓迎した．

しかし，10月17日から続々と台湾入りしてきた国民党軍を見て，台湾の人々は失望する．国民党軍の兵士は銃のかわりに鍋釜やカラ傘を下げ，ほとんどの者が草鞋をはき，中には裸足の者もいた．日本統治時代の日本軍とは大きく異なる姿を見て，台湾の人々は不安に駆られた．

蔣介石は，陸軍大将であった陳儀を台湾省行政長官兼台湾警備総司令官に任命し台湾接収[4]を命じた．10月24日には陳儀が台北に到着し，翌25日には台北公会堂（現在の台北中山堂）で日本第10方面軍参謀長の諌山春樹との間で正式な受降式典が行われた．これにより日本の台湾統治は終了した．

この10月25日はその後「光復節」という祝日に

写真２　国民党軍を歓迎する台湾の学生たち（台北二二八紀念館提供）．

写真３　陳儀行政長官（台北二二八紀念館提供）．

写真４　諌山春樹（左）と陳儀（右）の受降式典の様子（台北二二八紀念館提供）．

なっている．また，この日から台湾人は「本省人」と呼ばれ，中国本土から新たに渡来してきた中国人（国民党関係者）を「外省人」と呼ぶようになった．

国民党はまず，行政機関の中級，上級の職から本省人を排除して外省人が官僚を独占した．国営や省営の企業も管理職は外省人が占め，一般従業員からも意図的に本省人外しが行われた．これにより人口600万人余りの台湾社会に40万から70万人の失業者があふれることになった．さらに国民党政府や軍は台湾にあった日本人や日本政府の資産のほとんどを接収した．中国本土（大陸）は当時内戦中であったため物資不足に見舞われていた．その補填のために，それまで日本内地に移出していた米や砂糖が大陸に運ばれた．それが急激なインフレや売り惜しみ，官僚や政商の結託による隠匿などがあいまって米価の高騰と食糧難が起こった．終戦当時の米価は600グラム0.2元（２銭）であったが，その年末には12元となり，実に価格は60倍にも跳ね上がったという．他にも賄賂をはじめとする公務員の腐敗や汚職，兵士による略奪や銃を使った市民への威嚇が行われた．

このような国民党による統治を受けた本省人は「犬が去って豚が来た」（狗去豬來）と言って揶揄した．日本人はうるさいが番犬になった．しかし，中国人はただむさぼり食うだけで何の役にも立たないという意味だ．本省人の不満は日に日に募っていった．

陳儀は経済統制を行い，タバコや酒を専売品として販売した．しかし，専売品は質が悪く，しかも価格が高かった．そこで海外から密輸された質の高い闇タバコが出回るようになったとされる．

1947年２月27日の夕方，外省人で構成された台湾省専売局台北分局の取締官が闇タバコ売りの摘発に乗り出した．そして，延平北路（当時の太平町）で闇タバコを販売していた女性，林江邁（りんこうまい）（40）が取締官に摘発された．

彼女は夫と死に別れ，子どもの世話をしながら闇タバコを売って収入を得ていた．取締官は，林江邁が持っていた闇タバコと金を没収し，「没収品を返してほしい」と涙ながらに懇願する彼女の頭を銃床（銃の柄）で殴った．取締官の暴行と血を流して倒れる彼女の姿を見た民衆は，取締官を取り囲んで抗議した．思わぬ反撃に遭った取締官は民衆に向けて発砲し，その弾がたまたま通りを歩いていた青年，陳文渓（ちんぶんけい）に当たり彼は死亡した．

翌28日午前，前日の青年殺害に抗議する人々が犯人の厳罰を要求するため台湾省専売局台北分局に押しかけた．

怒りの収まらない彼らは局内へとなだれ込み，計器や机，ストックされていた酒やタバコなどを破壊し，火を付けた．その後，彼らは陳儀に陳情をするため行政長官公署（現在の行政院）へと向かった．公署の広場前に集まった民衆は行政の改善を要求した．すると突然，そこに向けて憲兵隊

写真５　林江邁（台北二二八紀念館提供）．

写真６　専売局台北分局前での抗議活動の様子（台北二二八紀念館提供）．

による機銃掃射が屋上から行われ，多数の死傷者が出た．

これにより民衆の怒りが爆発した．同日昼過ぎ，民衆は台北放送局（現在の台北二二八紀念館）を占拠し，台湾全土に向けて台北で起こった事件を伝え，決起を呼びかけるラジオ放送が行われた．この放送を受けて民衆の抗議運動は全土に広がった．本省人の中には，外省人の店を壊したり，通りを歩く外省人を殴打したりする者もいた．また，日本語が話せるかどうかを尋ねて，話すことのできない者を外省人とみなして暴行を行った．

28日の午後３時，陳儀は戒厳令を発令し，武装した軍や警察隊が動員された．彼らは本省人を目にするとすぐに発砲したため，武器を持たない多くの市民が射殺された．しかし，陳儀も本省人を完全に鎮圧することはできなかった．

３月１日，台北市参議会が本省人の国民大会代表，参政員，省参議員などを集めて「緝煙血案（闇タバコ摘発殺人事件）調査委員会」を設置した．そして，この委員会は陳儀に対して５項目の「建議」を行うことを決定した．その５項目とは，① 戒厳令をすぐに解除すること ② 逮捕された市民を即時釈放すること ③ 軍や警察隊の銃撃を禁止すること ④ 政府と本省人合同の処理委員会を設置すること ⑤ 陳儀がラジオで事件について説明を行うこと，である．

陳儀はこの建議を受けて，戒厳令は解除するが，その代わり民衆の集会やデモを禁止するとした．その日の夕方，陳儀は事件後初めてラジオ放送を行い，夜12時に戒厳令を解除することを約束．陳儀は（緝煙血案調査委員会の）代表と会見してその要求を認め，民政局長周一鶚および交通局長任顕群など５名を政府代表として派遣し，共同で処理委員会を組織した．しばらくして「緝煙血案調査委員会」は陳儀によって「二二八事件処理委員会」と改名された．

７日，二二八事件処理委員会は「32ヵ条の要求」を採決した．その内容は主に２つに分けられ，台湾に高度自治を敷いて政治形態を変えること，言論の自由や集会の自由などの基本的人権を保障することであった．

写真７　1930年代の台北放送局（『台北放送局暨台湾廣播電台特展專輯』（高傳棋　編著）．

陳儀はこの32ヵ条の要求を受け，承諾をほのめかしながら回答まで１日の猶予を求めた．その間，陳儀は蒋介石に電報を送って援軍を要請．国民党軍が台湾に到着するまで，時間をかせいだ．

翌８日，陳儀は前日と打って変わり「32ヵ条の要求」を断固拒否した．そしてその日の夜から９日にかけて，基隆港と高雄港に国民党軍がぞくぞくと到着した．この援軍を受けて陳儀は９日に再び戒厳令を敷き，二二八事件処理委員会などの人民団体を不法組織として解散，関係者の一斉逮捕を始めた．

これ以降，陳儀の命令によって大陸からの国民党軍による本省人への暴行，拉致，虐殺が始まった．逮捕した人の耳や鼻をそいで，腕や足を切断する．ビルの屋上から突き落とし，それでも死なない者はマシンガンで撃ち殺す．一人ひとり麻袋につめこんで海に投げ込む．このように本省人を殺害し，国民党軍は残虐の限りを尽くしたとされる．

また，国民党軍は本省人の指導者となりそうな人物を事前に粛清するために各地の名望家や知識階級のエリートを逮捕した．逮捕された者の中には，虐殺された人や，拷問を受けたのち莫大な保釈金を支払い釈放された人，現在まで消息を絶ったままとなっている人がいる．台湾の未来を背負うことが期待されていたエリートたちが多く殺されてしまったことは台湾の政治上でも大きな損害

となったとされている．こうして３月下旬までにほぼ全ての本省人による抵抗運動は鎮圧された．

当時，アメリカ駐台湾副領事だったジョージ・H・カーは二二八事件を目の当たりにして，この台湾の現状をアメリカに伝えた．この報告を受けたアメリカは蒋介石に対し，非人道行為をやめるように要求した．共産党との内戦で厳しい戦いを強いられていた蒋介石はアメリカからの借款に期待して陳儀を罷免した．その後陳儀は共産党に寝返ろうとしたとして，国民党により，1950年６月18日に銃殺刑に処された．

その後，台湾では二二八事件に関して口にすることはもちろん，文書などにおいてもタブーとされ，事件の真実は闇に葬られた．その理由が「白色テロ」である．この白色というのは赤色（共産党）に対峙している陣営（国民党）を表現している．

陳儀がいなくなったあとの1948年，国民政府は「動員戡乱時期臨時条款」を公布・施行した．さらに翌年には立法院が「懲治叛乱条例」を可決させ，恐怖政治体制が作られた．「懲治叛乱条例」の第二条一項には，内乱罪は死刑に処すると規定されている．この法律は長い間，人々を怯えさせた．

そして最後に，1949年５月20日にまたも戒厳令が敷かれ，軍事統治が行われた．この戒厳令は1987年７月15日になるまで38年にも渡り解除されずに続いていた．これにより台湾の人々は長い間，白色テロの恐怖に怯えながらの生活を余儀なくされてきた．

戒厳令の解除は1987年に当時の中華民国総統であった蒋介石の息子，経国によって宣言された．戒厳令の解除により，台湾はようやく，白色テロの時代を終えることができた．

1988年に蒋経国が死去し，その後任として李登輝が総統に就任した．彼が本省人初の総統であった．1995年２月28日，登輝は政府を代表して二二八事件の被害者遺族に謝罪し，償金が渡されることとなった．

1989年には候孝賢監督製作の映画『悲情城市』が公開された．これは二二八事件が直接的に描かれた初めての映画として話題となった．また，その映画がベネチア国際映画祭で金賞を受賞したことで二二八事件が世界的に知られるきっかけともなった．

二二八事件についての発言や研究が可能になった今でも，中華民国政府からの情報公開は未だに明確には進んでいない．行政院が1992年に発表した「二二八事件報告書」によると，この事件における本省人死者数は18,000人から28,000人とされているが，この数字も正確ではないと言われており，本当の受難者数は事件から68年経った現在も不明のままだ．

4.　調査研究の方法

実際に受難者遺族のもとへ足を運び，遺族の証言を記録した．予め構成した質問項目を各遺族の方々にお聞きし，ボイスレコーダーで録音．調査風景の写真を数枚撮影させていただいた．その後，録音した証言を文章に書き起こし，遺族の証言をもとにルポルタージュを執筆した．調査，執筆を担当したのは，中央大学 FLP ジャーナリズムプログラムを履修する学部生である．

また，ルポルタージュは一人称で執筆するため，執筆者の心境が盛り込まれ易い．このため，学生たちがどのような思いを抱き取材に臨み，証言を聴き，どのような心境の変化があったか知ることができると考えた．

各人が8,000～10,000字のルポを執筆後，10～15枚ほど関係する写真を選び，キャプションを付けた．写真は，取材風景の写真，受難者や家族の昔の写真，関係する資料の写真など．執筆が終わり次第，筆者がチェックを行った．日本語の文法上の間違い，固有名詞の確認，年月日の確認を中心に行い，それ以外は，極力，学生の自然な文章表現，感情の吐露を大事にした．

最終的には８本の原稿を執筆し，『中央評論 2014年秋号 no. 289』に特集「台湾二二八事件と中央大学卒業生」として掲載された．

取材対象者への質問項目は，次のように構成した．

質問１：受難者の生い立ち（家族構成，家庭環境，中大生時代について）
質問２：遺族にとって受難者はどのような存在か
質問３：取材対象者について（生い立ち，受難者との関係）
質問４：日本統治時代について
質問５：国民党統治時代について
質問６：事件当日の状況や心境
質問７：受難者が連行された当日の状況や心境
質問８：事件から60年以上経って，現在どう思うか

5.　聞き取り調査（取材）とスケジュール

5.1　受難者および調査対象者リスト

表１　調査対象者一覧と調査場所，日時

調査対象者（受難者）	関　係	大　学	場　所	調査日
李榮昌（李瑞漢）	息子	中央大学	台　北	2012年12月26日
林信貞（林連宗）	娘	中央大学	台　北	2012年12月26日
湯聰模（湯徳章）	息子	中央大学	台　南	2013年７月６日
陳木晉（陳金能）	息子	中央大学	高　雄	2013年７月７日
王嬋如（王清佐）	娘	中央大学	高　雄	2013年９月11日
張良澤（張旭昇）	息子	中央大学	台　北	2013年９月12日
王揚名（王金星）	息子	中央大学	屏　東	2013年12月25日
李藍慎（李瑞峰）	妻	中央大学	米国ヒューストン	2014年５月６日

5.2　調査（取材）スケジュール

表２　受難者家族への調査スケジュール

年	月		李榮昌・林信貞	湯聰模・陳木晉	張良澤・王嬋如	王揚名・王高明	李藍慎
2012年	9	**中大学生帽発見**					
	10	林信貞さんと連絡					
	11		取材準備				
	12		**取材**				
2013年	1		原稿執筆				
	2		原稿提出				
	6			取材準備			
	7			**取材** 原稿執筆	取材準備		
	8			原稿提出	取材準備		
	9				**取材**		
	10				原稿執筆	取材準備	
	11				原稿提出	取材準備	
	12					**取材**	

2014年	1					原稿執筆	
	2					原稿提出	
	3						取材準備
	4						取材準備
	5						**取材**
	6						原稿執筆
	7	最終チェック					原稿提出
	8	**納品・ゲラチェック**					
	9	表紙チェック					
	10	ゲラ最終チェック					
	11	中央評論秋号　特集「台湾二二八事件」発行					

6. 調 査 結 果

6.1 林連宗に関する調査結果

受難者　林蓮宗（失踪時，42歳）

証言者　林信貞さん（取材時，82歳）（林蓮宗氏の娘）

〈受難者の経歴〉

1905（明治38）年…台湾彰化市に生まれる．その後，台中州立第一中学校に進学．

1927（昭和２）年…日本の中央大学法科に入学．卒業と同時に台湾に帰国．

1930（昭和５）年…一人娘の林信貞さん誕生．

1947（昭和22）年…２月，台北市内で起こった暴動を止めるために台北へ向かう．

同　年３月10日…李瑞漢宅にいる時に国民党軍憲兵隊に連行され，行方不明．

〈取材日〉　2012年12月26日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

信貞さんの父・林蓮宗氏は1905年，台中の南にある彰化に生まれた．信貞さんの父方の祖父は，広大な田畑を持つ地主で，彰化の町では小魚などの干し物を売る店も持っていた．３人の兄と４人の姉妹がいたが，その中でも抜群に頭が良く，試験では常に一番だった．台中州立第一中学校でもトップの成績を修めた後，21，２歳の頃に日本の中央大学に留学し法律の勉強を始めた．

・父親との思い出

台北で仕事をすることも多かった父親の出張に同行したことがあったという（自宅は台中）．弁護士は，日本の裁判所にあたる「法院」で仕事をする．当時は，台湾各地に地方法院があり，台北には高等法院があった．普段は台中の地方法院で仕事をしていた林蓮宗氏だが，台北に出張して高等法院に控訴された案件を扱う機会も多かったらしい．信貞さんはそのお供として高等法院にも行っていた．台北に行くための汽車では，１車両に座席が８席しかない特等席に通された．父と一緒に広々としたその列車に乗りながら，「今日はどこに行けるだろう」と毎回楽しみにしていたそうだ．当時できたばかりの動物園に連れて行ってもらったこともある．

・日本統治時代

信貞さんは，幼稚園，国民学校，中学校，高校と，全て日本の学校に通い勉強していた．通っていた台中州立新富尋常小学校や台中州立台中第一高等女学校の生徒はほとんどが日本人で，台湾人は一クラスに２，３人しかいなかった．日本の学

校に通えるのは，台湾人でも家柄の良い子ばかりだったようだ．例えば，信貞さんのように父親が弁護士だったり医師をしていたりする家庭の子どもが入学できていた．信貞さんの家は『国語の家（台湾総督府が日本語教育の促進のため作った制度．日本語を用いる家庭を「国語の家」と認定した．認定されると，配給や学校の入試などで優遇された.）』であり，日常的に日本語を使っていたそうだ．

・国民党統治開始後

「戦時中に日本兵が台湾に駐屯していた時はかなり治安がよくて，窓を開けて寝ても大丈夫でした．ところが戦争が終わると，台湾には大陸の兵隊が入って来ました．彼らには教育も秩序も何もなくて，強盗や暴行など無茶苦茶なことをやったんです．特に終戦直後の時期が一番ひどかった．だから，大陸からやってきた国民党に対する不満や不安がかなりたまっていたんですよ」．

・受難経緯

タバコ屋事件の後，台北では本省人が暴走しているという噂が広まっていた．林蓮宗氏は台湾人の暴動を止め正常化させるために台北に行くことになった（自宅は台中）．林蓮宗氏が台北に出発したのは，２月末のまだ寒い日で，お昼にならない頃だった．「私は学校があったけど，ちょうど出掛ける前に会えたんです．父は背広にオーバー姿でした．『お父さんは，台北で大事な仕事があるから，行ってきます．その間はお利口にして，おばあさんとママと仲良くして待っていなさい』と言ってくれました．私は『はい，わかりました．行ってらっしゃい』って．それが，父の最後の声となりました．それ以来，ずっと行方不明です．仕事が終わったら早く帰ってくるよ，といつも言われていたから，父の言う通り，またすぐにでも会えると心で思っていたんです」．二二八事件関連の仕事を終えた林蓮宗氏は，すぐに台中に戻ろうとしていた．ところが帰りの汽車が動かなくなり，仕方なく李瑞漢さんの家に一晩だけ泊めてもらうことになった．李瑞漢さんは中央大学の同窓生で，かつ弁護士仲間．以前から交流があり，李さんの家は台北市内にあったからだ．李瑞漢さんの家で，夕食にスルメ粥を食べようとしたその時．４人の憲兵がジープに乗ってドカドカと乱暴に李さんの家に入ってきた．憲兵たちは，まず「お前は誰だ」と林蓮宗氏や瑞漢氏に聞いた．

写真８　証言する信貞さん．

写真９　林蓮宗氏（左）と娘の信貞さん（右）（台北二二八紀念館提供）．

李さん兄弟は弁護士だと説明し，林蓮宗氏も名刺を出した．すると，「陳儀（台湾行政長官）が話がある」と言われ，ジープに乗せられて家から連行された．

・現在の心境

「今でも毎日思い出します．あんな良い人を何で連れて行ってしまったのでしょう．怒りと苦しみで本当に胸が一杯です．政府には正式に謝って欲しいです．賠償という話は出ているけれど，でも本当は賠償という考えはおかしいはずです．人をお金に代えることはできないですから．弁護士の稼ぎの話ではなくて，お金では人を換算できないんです．そういう話を聞くと，なんて人のことをばかにしているんだろうと悲しくなります……」．

6.2　李瑞漢に関する調査結果

受難者　李瑞漢（失踪時，41歳）

証言者　李榮昌さん（取材時，80歳）（李瑞漢氏の長男）

〈受難者の経歴〉

1906（明治39）年…７月20日，台湾竹南郡（現，苗栗県竹南鎮）に生まれる．

1926（大正15）年…台中州立台中第一中東学校（現，国立台中第一高級中学）卒業．

同　年　　…中央大学法科入学．

1928（昭和３）年…同大学卒業．

1929（昭和４）年…高等文官試験司法科に合格．

1931（昭和６）年…台北永楽町で弁護士事務所を開業．

1938（昭和13）年…４月，台北市弁護士会副会長に就任．

1939（昭和14）年…11月，台湾第二届市会議員に当選．

1947（昭和22）年３月10日…午後５時ごろ憲兵隊に連行され行方不明．

〈取材日〉　2012年12月26日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

李瑞漢氏は1906年７月20日，台湾竹南郡（現，苗栗県竹南鎮）で７人兄弟の長男として生まれた．当時，中央大学法科は，台湾でもとても有名であった．台中州立台中第一中東学校（通称，台中一中）の先輩である林連宗氏（二二八事件当時，台湾弁護士会会長）が，中央大学法科に通っていたことも，李瑞漢氏が中央大学を目指した理由だという．瑞漢氏は，中央大学在学中に弁理士試験に合格．また，1928（昭和３）年に中央大学卒業後も大学に留まり研究を続け，翌年に司法試験に合格．台湾に戻り，台北市永楽町（現，迪化街）で弁護士事務所を開業した．

・父親との思い出

「父は時々，私たちを旅行に連れて行ってくれました．台湾の南の方や，宜蘭（ぎらん）とかね．夏は海水浴に行ったりしました．家族みんなで．昔はゆとりがありました」．

・日本統治時代

榮昌さんは寿小学校（現，西門国民小学校）という日本人の学校に通っていた．「台北市の西門町にあります．西門町は，日本でいう新宿みたいな場所で，賑やかなんです．当時は差別によって，台湾人は入学できませんでした．しかし，私の父は弁護士でしたから，特別優待で入学できたんだと思います．しかし，台湾は植民地だから，私はやっぱり学校ではいじめられました．よく殴られました．土曜日になると上級生がクラスに来て，『放課後，便所裏に来い』と言うんです．そしてもちろん行くと殴られます．殴られた後，こっちが『ありがとうございました』と言わないと，また殴られます．戦争中だからなんとも言えませんでした」．

・国民党統治開始後

「中学校で，玉音放送を聞きました．そのときは，日本は負けたなあ，良かったなあ，と思ったんです．解放された，と思ったんですね．正直に言うと．これで，日本人に殴られずに済むなあと……．しかし，それは，間違いの始まりでした．

日本人がいなくなって，今度はでたらめな連中が来ました．国民党軍です．彼らは教育水準が低すぎたんです．例えば，水道栓を買って壁につけておいて，『水が出ない』と買った店に文句を言う．当たり前ですね，水道管に繋げていないのだから．教育の程度が，とにかく低かった．それに，国民党の役人は腐敗して，法律を守らない．まさに，『犬（日本人）が去って，豚（国民党）が来た』です」．

・受難経緯

二二八事件後，父親の李瑞漢氏は台北市弁護士会会長として，陳儀長官へ建議書を提出した．「二二八事件が起きてから，陳儀長官は各方面からの改革案の提出を歓迎していました．それで，父は台北市弁護士会を招集・開会して，時局を鑑みて広く意見を集め，改革の建議書を提出しました」．同年３月10日．この日，同じく中央大学出身で台湾弁護士会会長を務めていた林連宗氏は，「二二八事件処理委員会」終了後，台中市にある自宅に戻ろうと台北駅に出向いたが，混乱で列車が止まっていた．困った彼は，公会堂の前にある，李瑞漢氏の事務所を訪ねた．李瑞漢氏は林連宗氏を台北市にある自宅に泊まるよう勧めた．同日午後５時頃．林連宗氏，李瑞漢氏，そして弟で同じく弁護士であった李瑞峰氏の３人は，自宅で夕食をとろうとしていた．「買い物にも行けない状況の中，たまたま隣の家からスルメイカを３つもらいました．そこで母はお粥を作り，そのスルメイカを刻んで入れました．『せっかくお客さんが来たのに，何も出せるものがない』と困っていたところに，スルメイカを頂いて助かったと母が言っていたのを覚えています」．そして，３人がちょうどスルメイカのお粥を食べようとした時，国民党軍の憲兵隊が軍用車でやって来た．「憲兵の数は４人だったと記憶しています．２人は軍服を着ていて，もう２人は私服でした．憲兵隊の隊長が『陳儀長官が３人に会いたがっている』と伝えると，父たち３人は急いで着替え，憲兵隊とともに家を出ていきました．私が彼らに付いていこうとすると，父から『帰りなさい』と言って突き返されました．そして，それが最後の言葉となりました．以降，父が家に帰ってくることはありませんでした」．

写真10　李榮昌さん．

写真11　李榮昌さんの父・李瑞漢氏（台北二二八紀念館提供）．

・現在の心境

「父が帰って来なかったことは，もう諦めています．でもね，父が憲兵隊に連行された時に食べようとしていたのが，スルメイカのお粥だったことは，絶対に忘れません．だから，我々にできることはね，連行された３月10日には，毎年，どんな場所にいても，スルメイカのお粥を食べ続けることなんです．銀行からアメリカに派遣されて勤

務していた時も，同僚の誘いを断って，『今日はだめだ．だめなんだ』と言って，家でスルメイカのお粥を自炊して食べました．事件のことを絶対に忘れないためにです……」．

6.3　李瑞峰に関する調査結果

受難者　李瑞峰（失踪時，38歳）
証言者　李藍慎（取材時，92歳）（李瑞峰氏の妻）

〈受難者の経歴〉

1911（明治44）年…台湾竹南郡（現，苗栗県竹南鎮）に生まれる．
1940（昭和15）年…中央大学法科卒業．
同　年　　…高等文官試験司法科に合格．
不　明　　…台湾へ帰国後，大東信託株式会社で働く．
1945（昭和20）年…国民党政府から弁護士資格を取得し，宜蘭にて弁護士の仕事を始める．
1947（昭和22）年３月10日…午後５時頃，憲兵隊に連れられて家を後にし，以後消息不明となる．

〈取材日〉　2014年５月６日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

藍慎さんの夫・李瑞峰氏は1911年，台湾竹南郡（現，苗栗県竹南鎮）で７人兄弟の次男として生まれた．瑞峰氏は1940（昭和15）年に中央大学法科を卒業し，同年高等文官試験司法科に合格．日本の会社で１年半ほど研修をした後に台湾へ戻り，大東信託株式会社で働いていた．終戦後，瑞峰氏は国民党政府から弁護士資格を取得し，宜蘭で弁護士の仕事を始めた．

・夫との思い出

夫である瑞峰さんのことを藍慎さんは「優しい人でした．とてもいい人だったの．家庭を大事にしてね，荒い言葉ひとつかけたことない」と語った．瑞峰氏と藍慎さんは仲人の紹介でお見合いし，結婚に至った．藍慎さんは結婚して間もない頃のエピソードも話してくれた．「結婚してから日本に行きまして，東京の東中野に住んでいました．それからしばらくして，お産で台湾に帰りました．台湾には父母がいますからね」．

・日本統治時代

藍慎さんは新北市双渓区に生まれ，双渓小学校，基隆高等女学校を卒業した．「私のうちは田舎だったから，基隆の女学校に行くのに毎朝６時10分の汽車に乗って１時間，それからバスに乗り換えて学校に通っていたの．女学校は人数が110人で，そのうち100人が日本人，台湾人は10人だけ．女学校の中では，私がよく付き合っていたのは台湾人．あの時の台湾人と日本人は，区別されていましたね」．女学校で日本人と台湾人は別々に扱われていたという環境のせいか，やはり藍慎さんは主に台湾人の同級生と仲がよかったようだ．

・国民党統治開始後

「終戦当時，台湾の人はみんな『祖国に帰った』と言って喜んでいました．日本人がいた時は，日本人から抑えられていました．私なんかは，小さい時から日本人と一緒の小学校，女学校だからね．逆に私の場合は，友達がいなくなってしまう．だから，うちの父親が『日本人の学校に行かせるんじゃなかった』なんて言っていました．ただ，中国の兵隊たちがやってきて，台湾の人を殺してしまって．そんなこともあって，台湾の人は今でもあんまり大陸の人を歓迎してません．でも私なんかは小さい時から，悪く言えば，日本人が来たり中国人が来たりすることに慣れてしまってました」．

・受難経緯

「連れていかれる前の日，うちの主人は主人の兄の家で麻雀をしていて，その日の晩は家に帰ってきませんでした．それで翌朝，私は義兄の家を訪ねて，夫を迎えに行きました．そしたらその留守中に，国民党の兵隊が私の家に来て，主人を連行しようとしました．けれど，主人はうちにいなかったでしょ．だからうちにいた家政婦さんが，

『お兄様のところに行きました』と兵隊の人に伝えて，兵隊の人は主人の兄の家に行ったのです．それで主人と主人の兄が連れていかれました．でも主人の兄の李瑞漢弁護士は，『お友達だから』と言って国民党の兵隊さんを『どうぞどうぞ』って言いながら応接間に招いていたの．だから，連れていかれたというよりは，お友だち（兵隊さんたち）と一緒に出掛けたという印象です」．その後，夫である李瑞峰氏はいつまでたっても帰ってこなかった．それを不思議に思った藍慎さんは，瑞峰氏の弁護士仲間などに，夫の行方を聞いてまわった．しかし，結局瑞峰氏の行方は分からなかった．連行されてからしばらくして，歯医者だった藍慎さんのいとこが，患者さんから瑞峰氏と瑞漢氏の行方について耳にしたそうだ．その患者さんの情報によると，李瑞峰氏は兄の李瑞漢氏とともに台北の淡水河のほとりで銃殺された後，川下のほうに遺体が流されていった，ということだった．

写真12　李藍慎さん．

写真13　娘を抱く李瑞峰氏（台北二二八紀念館提供）．

・現在の心境

「主人兄弟は，ああいう悲惨な最期だったでしょう．主人たちは，なんにも悪いことしてないのにね．なんにも罪がないのに．それだけが今でも心に残ってね．私は助けてあげることができなかった．だからあの時のことは，考えたくもないし見たくもない．思い出したくない．今まで忘れようと努めて生きてきました．運命だと思わないと生きて来れませんでした．私がこの話をするのは今だけですよ，今だけ．でも本当は，みんなにわかってもらいたい．うちの主人兄弟の境遇を，やっとみんなにわかってもらえると思うとね，嬉しく思います．きっと，主人たちも嬉しいと思いますよ……」．

6.4　湯徳章に関する調査結果

受難者　湯徳章（享年41歳）

証言者　湯聰模（取材時，78歳）（湯徳章氏の養子「湯徳章氏の姉・湯柳の第５子」）

〈受難者の経歴〉

1907（明治40）年…台南県玉井郷に日本人警官と台湾人の母の間に生まれる．

1920（大正９）年…台南師範学校入学．1922年，中退．

1927（昭和２）年…台南州巡査を務める．

1938（昭和14）年…日本に渡り，中央大学で聴講生となる．

1942（昭和17）年…高等文官試験司法科合格

1943（昭和18）年…高等文官試験行政科合格，台湾に戻り台南で弁護士登録．

1945（昭和20）年…台南市南区区長に当選．

1946（昭和21）年４月…台湾省参議会候補参議員に当選．

同　年　　10月…台南市人民自由保障委員

会主任委員に就任．

1947（昭和22）年３月…二二八事件処理委員会台南市分会治安組長に就任．

同　年　　３月11日…民生緑園（現，湯徳章記念公園）にて処刑される．

〈取材日〉 2013年７月６日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

湯徳章氏は，1907年１月16日台南庁噍吧哖（現，台南市玉井区）に生まれた．父親の坂井徳蔵氏は，日本人の警察官であった．この父親が台南にある南庄（なんしょう）派出所（現，南化（なんか）派出所）の巡査部長であったとき，地元の台湾人女性・湯玉氏と懇意になり，徳章氏を授かった．当時の事情から台湾在留の邦人役人は，台湾人と結婚できなかったため，彼や姉，弟も全て母方の姓を名乗っていた．そのようなこともあり，子どもの頃から円満な家庭とはいえなかったという．「結婚が認められていなかったので，父は祖母の姓『湯』を名乗っていました．台湾と日本のハーフということで苦労も多かったと聞いています」．台南師範学校を退学後，徳章氏は巡査となった．彼は瞬く間に昇進し，巡査から巡査部長，さらには警部補，甲種警部（警官）となった．彼が巡査を務めていたとき，日本人医師が台湾人青年をひき殺した事件が起きた．警察は，この事件をもみ消そうとしたのだ．しかし，徳章氏は権力に屈する事なく，徹底的な捜査を主張したが，結局どうすることもできず，事件は闇に葬られた．母親が台湾人であったため，徳章氏は警察内で日本人との差別もあったという．仕事をしていくうちに「警察官の仕事は，長官や政治家の命令を聞くばかりだ」と，警察官の仕事に対して不満を持つようになった．警察では人民のために正義を貫き通すことはできないと思い，徳章氏は警察官の職を辞することを決める．警察を辞めた後，徳章氏は父の弟である坂井又造氏（後，新居徳蔵に改名）を頼って，一家全員で日本に渡ることになった．そして，中央大学法科の聴講生となる．1942年高等文官試験司法科資格に合格，翌年高等文官試験行政科資格に合格したが，日本で就職することは考えず，その後家族と共に台湾へ帰国し，台南市で弁護士登録をした．

・父親との思い出

「私の親父は筋一本通っていて，素直で真面目でした．また，礼儀にもうるさい人でした．私が小学生のとき，家に親父の友達が来て，お土産を持ってきたんです．そのときはまだ私も無邪気で，お客さんがその場にいるにも関わらず，お土産の中身が気になって，その袋を破いて開けてしまいました．そのお客さんが帰った後，無礼だと，親父にぶん殴られました．親父に怒られたのは，生涯その一度きりです」．

・国民党統治開始後

戦後，湯徳章は台南地区で活発に活動を行い，名声も高かった．そのため1945年には台南市南区の区長に推薦された．区長に就任してからほどなくして，台南ではコレラが流行した．徳章氏は消毒や隔離，予防接種の実施を提案したが，中国から来た長官はコレラに慣れていたためか，その対策に取り合わなかった．徳章氏はその人の命を軽んずる態度に不満を抱き，区長の職を辞してしまった．その後，陳儀長官の強い要望により，台湾省公務員訓練所所長に推薦された．しかし徳章氏は断固として国民党政府の官職には就かないと拒否した．彼は，「中国の官僚になるには，汚職をする覚悟をしなければならないが，私は良心を売り渡すようなことをするつもりはない」と周囲に漏らしていたという．

・受難経緯

周囲からの信頼が厚かったため，事件後，治安組長に推挙された．しかし国民党軍によって，「反逆首謀者」として逮捕されてしまう．３，４日間，彼の協力者を見つけ出すために，徳章氏は拷問を受け続けた．肋骨が全て折れるほどの拷問を受けたが，誰１人として仲間の名前を明かさなかった．３月11日，徳章氏は両手を後ろに縛られ，背中に名前が書かれた木版をつけ，車の荷台に乗

せられて市内を引き回された．最後に，徳章氏の銃殺刑が執行された．妻の湯陳襤氏は，処刑が行われる民生緑園（現，湯徳章記念公園）に，夫の最期に駆け付けたが，現場に到着する前に銃声を聞いた．銃殺刑執行後も軍によって，徳章氏の遺体はすぐには引き渡されなかった．遺体はそのまま民生緑園内に放置された．「さらし者にするために，そこに放置されました．見世物にして，みんなを威圧し，脅していたんです」．ただ，時間が経つにつれて，その遺体にはハエが群がってきたという．見ていられなくなった妻の陳襤氏は毛布を掛けようとした．しかし，兵士はその毛布を剝ぎ取った．そして，遺体に砂利をかけた．ハエが群がらないようにするためにしたことだった．「人間というのは本当に残酷だなと思ったね．私には，理解できないです．そこまでやらなくてはいけないのか．母は茫然として，涙一つ流しませんでした．泣くにも泣けなかったのだと思います」．

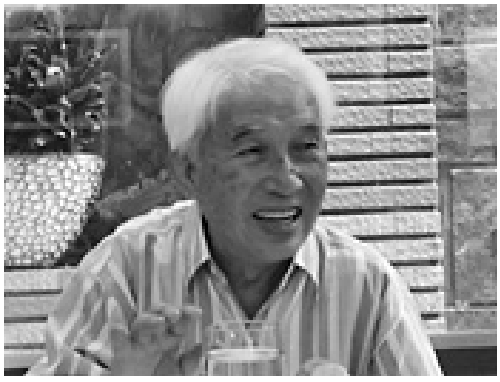

写真14　湯聰模さん．

写真15　湯聰模さんの父・湯徳章氏（台北二二八紀念館提供）．

・現在の心境

「正直に言うと，もう思い出すこともしたくありません．私が親父に対して，親子の情がないということはないですけど，私は非常に無責任な人間だと思います．私は娘や息子にすらこういう話はしたくありません．語り継いで事件の記憶を残すことはもちろん重要です．それでも，周りに無責任と言われようとも，なにも考えたくないのです」．

6.5　陳金能に関する調査結果

受難者　陳金能（享年45歳）

証言者　陳木晉（取材時，72歳）（陳金能氏の三男）

〈受難者の経歴〉

1902（明治35）年…台湾屏東縣東港鎮に生まれる．

1927（昭和２）年…中央大学法科入学．

1930（昭和５）年３月31日…同学卒業．

同　年　11月27日…師範学校中学校高等女学校教員無試験検定に合格．

1946（昭和21）年…日産処理委員会の主任委員に就任．

1947（昭和22）年３月６日…高雄市政府内にて銃殺．享年45歳．

〈取材日〉 2013年７月７日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

木晉さんには２人の母親がおり，２番目の母親から４人兄弟の３男として生まれた．実家は米問

屋で，地元でも裕福な家庭だった．日本で司法試験を受けた後は，台湾に戻り，高雄で弁護士事務所を開業．終戦後，日本が台湾から引き揚げると，残った日本企業は全て陳儀長官によって公営事業にされた．台湾総督府の産業施設や日本人の民間企業を管理するために「日産処理委員会」が1946年１月に設立された．陳金能氏は日本語と中国語が堪能であるという理由から，委員会の主任委員として就任要請された．

・父親との思い出

「父との一番の思い出は，一緒に西子湾の海に遊びに行ったことです．私はまだ幼かったので，父から怒られたこともなく，とても可愛がられました．また父親はとても母親思いでした．父は弁護士として高雄で働いていましたが，何日かおきに故郷の屏東県東港に帰り，病気の母親を見舞っていました．当時の交通は不便であったにも関わらず，自転車で訪れていたそうです」．

写真16　陳木晉さん．

写真15　陳木晉さんの父・陳金能氏（陳木晉さん提供）．

・受難経緯

台北で始まった二二八事件の影響は，３月３日には高雄まで波及した．青年を中心とする抗議活動の市民団体が台北から高雄に侵入し，高雄市民と合流．軍の兵営を攻撃し，国民党軍と激しい銃撃戦を繰り広げた．こうして，高雄市民と軍の衝突は次第に悪化していき，５日には事態を収束させるために「高雄二二八事件処理委員会」が組織された．そして３月６日午前９時，黄仲図市長ほか高雄市を代表する各界の名士７人で結成された「和平交渉団」が高雄要塞司令部のある寿山へ向かい，彭孟緝司令官との和平交渉を行った．その中で陳金能氏は，その他の各界の名士たちと共に，和平交渉団の帰りを高雄市政府内の会議室で待っていた．ちょうど14時頃だった．市政府で交渉団の結果報告を待っていた陳金能氏たちが昼食をとろうとしていたまさにその時，国民党軍が市政府になだれ込み，会議室に押し入った．彭孟緝の軍隊が突然下山し，武力鎮圧を断行した．父が亡くなったことを木晉さんが知ったのは，それから３，４日経ってからのことだった．陳金能氏の友人が，この悲報を陳夫人に知らせたのだ．遺体はすでに市政府広場の木の下に運ばれていた．外は緊張状態が続いており，出歩くのは非常に危険だったが，家族はどうにかして父の遺体を家まで届けてほしいとその友人に懇願した．友人は引き受け，近所の材木屋の倉庫のドアを遺体運搬の担架代わりにし，数日間野ざらしになった陳金能氏の遺体を家族のもとへ運んだ．父の変わり果てた姿を目の当たりにした木晉さんは「父は見るも無残な姿で帰ってきました．手足はすでに硬直し，衣服は破れ，瞳孔は開いたままでした．おそらく突然，頭部を銃弾で打ち抜かれたからでしょう．さらに胸部は銃剣で２か所刺され，大腿部も無数に刺された痕がありました．兵士達は銃で撃った

後，まだ息のある者を確認すると，銃剣で突きまくったといいます．しかも，刺した銃剣を回転させるので，刺された部分は肉がえぐれて削げ落ちていました」．

・現在の心境

「ようやく二二八事件のことを口に出せるようになりました．父は誰に殺されたのかも分からないし，真実もはっきりしていません．そんな父を，私は今でも思い出すことがあります．二二八事件に関して明確な事実は，被害者は明らかなのに加害者は誰か分からないということではないでしょうか．必ず，私が生きている間に，事件の全ての真実を父に報告したいです」．

6.6　王清佐に関する調査結果

受難者　王清佐（受難時，44歳）

証言者　王嬋如（取材時，80歳）（王清佐氏の娘）

〈受難者の経歴〉

1903（明治36）年…台湾屏東県萬丹に生まれる．

1921（大正10）年…台中州立台中第一中等学校（現，国立台中第一高級中学）卒業．

1928（昭和３）年…中央大学法科卒業．

1940（昭和15）年…高雄市にて耀門弁護士事務所を開業．

1946（昭和21）年…高雄市参議員に当選．

1947（昭和22）年…３月７日か８日に，国民党の兵士によって連行される．

同　年　…連行されてから100日ぶりに自宅へ戻る．その後，弁護士業へ戻ることはなかった．

1969（昭和44）年…死去．享年67歳．

〈取材日〉　2013年９月11日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

王清佐氏は1903年１月18日，屏東県の萬丹で４人兄弟の次男として生まれた．1921年に台中州立台中第一中等学校を卒業後，勉学のため日本へ渡航．清佐氏の父は清佐氏が医学部へ進んで医者になることを望んだが，清佐氏は中央大学法科へ入学した．1928年に中央大学卒業後，清佐氏は日本の高等文官試験司法科を受験した．清佐氏はこの試験に毒薬を持ち込んで臨んだ．試験に落ちたらその毒薬を飲み，自殺するつもりだったのだ．そして，命がけの覚悟で臨んだ試験は無事に一発合格．日本の弁護士事務所での見習いを終えて清佐氏は台湾へ戻った．清佐氏は台南で弁護士として働き，1931年に結婚．嬋如さんの誕生を機に王さん一家は高雄に移り，1940年に「耀門法律事務所」を設立した．

写真18　王嬋如さん．

写真19　王清佐氏（左）とその妻（中央），娘の嬋如さん（右）（王嬋如さん提供）．

・日本統治時代

嬋如さんは終戦当時，小学校４年生だった．その当時の台湾には台湾人が通う公学校と日本人が通う小学校があったが，嬋如さんは高雄にある大和小学校に日本人と一緒に通っていた．「やっぱり父が弁護士だった関係で入れたんだと思います．その時はお医者さんや弁護士の家庭は日本人が通う小学校に入れました．いじめられたことはありませんでした．最近はみんな年を取ったので開けなくなったのですが，同窓会はずっとやっていました．今も私は，日本に行って小学校のお友達に会っています」．

・国民党統治開始後

1947年２月28日に台北で二二八事件が起きると，３月３日にはその騒乱が高雄にも及んだ．６日には高雄市政府が寿山から降りてきた国民党軍兵士によって攻撃され，高雄市議会に参加していた参議員の多くが殺害された．

「あの日，どうしてか知らないけど父は市政府に行かなかったの．知り合いがたくさん兵士に掃射されて亡くなりました．父は幸いに市政府に行かなかったから亡くならずに済んだんです」．

・受難経緯

1947年３月６日に国民党軍からの攻撃に遭わずに済んだ清佐氏だったが，ついに兵士が清佐氏のもとにやってきた．「正確な日付は忘れましたが，７日か８日の午後２時頃．兵隊が家にやってきました．そしたら，父が『私は階段の下に隠れるから，あなたたちは早く防空壕に行きなさい』と言いました．父は階段の下にあった小さい部屋に隠れて，私と母親は庭の防空壕に隠れました．その時はまだ防空壕が残っていましたからね」．清佐氏は国民党の兵士が来ても家族に危険が及ばないように，嬋如さんと妻に防空壕に隠れるよう指示した．嬋如さんと母親は約30分間，防空壕の中で息を潜めていた．「母親と防空壕に隠れている間は怖かった．兵隊さんが庭を走っている音も聞こえたし，降りてきて見つかるかもしれなかったから．防空壕と家の間が遠かったから家からの声は聞こえなかったけど，バンバンバンって銃声は聞こえました」．嬋如さんと母親が防空壕を出て，家に戻るとそこに清佐氏の姿はなかった．荒らされた家からは金目の物が奪われており，壁には銃痕が残されていた．逮捕からおよそ100日後，清佐氏は釈放された．罪状は「政府転覆を目論んだ」という事実無根のものであった．釈放には執行猶予３年が付いていた．清佐氏の両手両腕にある拷問の傷跡を見た嬋如さんは，「嬉しかったという気持ちもあったけど，悲しかったという気持ちもあります」と複雑な心境を吐露した．王清佐氏は拷問による精神的ショックで，その後弁護士の職に戻れなかった．

・現在の心境

「感想も何もないわ．なんで二二八事件が起きてしまったのかも分からない．それも運命だから．あきらめるしかない……」．

6.7　張旭昇に関する調査結果

受難者　張旭昇（逮捕時，42歳）

証言者　張良澤（取材時，73歳）（張旭昇氏の次男）

〈受難者の経歴〉

1905（明治38）年…台南縣歸仁鄉（現，台南市歸仁區）に生まれる．

不　明　…中学，高校ともに台南師範学校で学ぶ．

不　明　…台南師範学校卒業後，教師を３年間務める．

1929（昭和４）年…中央大学専門部法科入学

1932（昭和７）年…同学卒業．

同　年　…中央大学（本科）法科入学．

1935（昭和10）年…同学卒業．

不　明　…高等文官試験司法科および行政科に合格．

1936（昭和11）年…台南に戻り，弁護士事務所を開業．

不　明　…台南工学院で治安維持を呼びかける講演を実施．

1947（昭和22）年…憲兵隊に逮捕される．

1948（昭和23）年…釈放され，台南の自宅に戻る．
1952（昭和27）年…弁護士に復帰．
1979（昭和54）年…死去．

〈取材日〉 2013年９月12日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

張旭昇氏は1905年に台南縣歸仁郷（現，台南市歸仁區）で，二人兄妹の長男として生まれた．張旭昇氏は３歳の時に空襲で父親を亡くし，５歳で母親も亡くした．幼少期に両親を亡くした旭昇氏は祖父母に育てられた．当時の台湾情勢は決して良いものではなかったが，祖父である張茂齢さんは地主であったため，経済的に困ることはなかった．張旭昇氏は台南師範学校を卒業後，３年間教師を務め，日本の中央大学専門部法科に入学した．専門部に３年間在籍した後，中央大学法科へ入学した．

・国民党統治開始後

1945年８月15日，良澤さんは天皇の玉音放送を聞き，終戦を知った．台湾全土が，祖国復帰を「光復を迎えた」と喜んだのも束の間，良澤さんは恐ろしい場面を目撃したという．「国民党が台湾にやって来た後，私は国民党の兵士が大きな銃を持って靴も履かずに，路上で生活している人々を次々に殺していく光景を見ました．日本の兵士と比べ，身なりも整っていないし，やることも残虐でした」．

・受難経緯

1947年２月28日に二二八事件が台北で起こった後，台南縣参議会は臨時治安委員会を組織．数日後，本委員会からの要請により，張旭昇氏は台南工学院において治安維持の協力を呼びかける講演を実施した．この講演の実施にあたっては，一度台南工学院の代理院長である葉東滋に断られていた．しかし，自分の町の安寧を守るためにという理由で，最終的には講演会は行われた．講演後に台南工学院の学生らは学生治安隊を組織したという．３月11日，国民党の軍隊が台南に押し寄せた．台南の自宅にいた張旭昇氏はいきなり来た国民党の兵士数名に，銃を突き付けられながらトラックに乗せられ，連行されてしまう．旭昇氏が国民党の兵士に連行された時，自宅には良澤さん本人と，彼の母親，兄，弟がいた．６歳であった良澤さんは，２階から父親が銃を突き付けられ，トラックに乗せられるまでの一部始終を目撃した．「私は父が連れて行かれた時ちょうど２階にいたんです．その時は兵士が銃でもって父を脅して，直接トラックに乗るように命令していました」．その後，家族は張旭昇氏を助けるために奔走．逮捕後約10カ月が経過したある日，張旭昇氏は自宅

写真20　張良澤さん．

写真21　息子である良澤さんを抱きながら写真に写る張旭昇氏（『槍口下的司法天平』より）．

に戻った．家族全員が旭昇氏の帰りを喜んだ．家族を養うため，張旭昇氏は再び弁護士として働き始めた．

・現在の心境

「二二八事件で受難された中央大学関係者は合計で16人いて，その中の８人が殺されました．これはとても悲惨な，悲しい現実です．今後も日本と台湾は良い関係を維持し，日本にもこの悲惨な事件を伝え広めて欲しい．もちろん台湾人自身ももっとこの事件に関心を持たなければなりません．自分たちが決起して，台湾をより良くしていかなければと思います」．

6.8　王金星に関する調査結果

受難者　王金星（受難時，41歳）

証言者　王揚名（取材時，78歳）（王金星氏の息子）

〈受難者の経歴〉

1906（明治39）年…５月18日，台湾恒春県（現，屏東県枋山郷楓港）に生まれる．

1920（大正９）年…内地（現，日本）へ留学．

1925（大正14）年…私立立命館中学（現，立命館中学校・高等学校）卒業．

同　年　　…中央大学法科入学．

1929（昭和４）年…同学卒業と同時に台湾へ戻る．

1943（昭和18）年…高雄州恒春郡枋山庄の庄長に就任．

1947（昭和22）年…３月10日，国民党軍により銃殺される．

〈取材日〉　2013年12月25日

〈証言内容〉

・受難者の生い立ち

1906年５月18日，金星氏は台湾恒春県（現，屏東県枋山郷楓港）に生まれた．祖父の代から山林事業を営む裕福な家庭で，金星氏の祖父と父も庄長を務めたという．公学校５年生の時，金星氏は父の勧めで日本に渡航し私立立命館中学に進学した．同中学校卒業後，中央大学法科へ進学．中央大学在学中は柔道部の主将を務めていたという．そして，家業を手伝うため，卒業と同時に台湾へ戻った．台湾に戻ってきた後は，家業である山林事業に携わった．その後，兵役により高雄の軍港整備に参加．施設部で働いていたという．そこでの働きが認められてか，兵役終了後，金星氏は枋山庄の庄長に任命される．

・父親との思い出

「『弟が南方戦線に派遣になったから，台北に面会に行こう』と．父はおじいさんと子どもをつれて，当時交通も不便な中，わざわざ台北まで行きました．だから僕は，父の心構えって印象に残ってるんです．兄弟とか，家族に対する優しさとかね」．

・日本統治時代

「台湾人も日本人も一緒．僕はぜんぜん区別してなかった．当時，学校は小学校と公学校があった．公学校は一般台湾人，小学校は日本人が通うところ．でも台湾人の中で，特に日本に貢献している人は小学校に通っていた．僕も一年間小学校に通っていたんですが，台湾人と日本人との差別は，統治時代には感じなかった．だから，日本人が嫌いとかそういうことはない」．

・国民党統治開始後

「『人間が違う』と．これだけ感じた．日本人から中国人になって，物事の進め方も精神もすべて変わっちゃったって印象が深いです．台湾人はみんな『日本に戻りたい』とか言っていた．中国人の兵隊は，道理に外れているのを深く感じる．利益を優先して，人の命を軽視するのは人間らしくない．平気でそういうことをやるんだよね．『人間らしくない』と僕はいつも言っている」．

・受難経緯

二二八事件後，庄内の治安悪化を懸念し積極的に治安維持活動を行った．この活動のために，王金星氏は恒春の派出所へ鉄砲３丁と銃弾100発を借りに行った．そして，借りた銃と弾丸を恒春の

写真22　王揚名さん．

写真23　王金星氏（王高明さん提供）．

派出所へ返却しに行った際，国民党軍によって逮捕された．「恒春の派出所に銃を返しに行った時，そこの所長にお茶に誘われた．お茶を飲んでいる間に，所長が裏で人を派遣して，軍隊を呼んできた．銃を借りた時に反動分子だと目をつけられていたんでしょう．それで銃を装備した軍隊がやってきて，親父を連行してしまった」．金星氏はそのまま，当時恒春神社の境内にあった国民党要塞司令部の営舎に連れて行かれたという．そして，「戒厳令下，営舎の外は危険だ．中にいた方がよい」と言われ，金星氏は帰ることもできない状態に置かれたという．そして３月10日早朝，（旧）恒春神社の境内から少し離れた場所で，銃殺されたという．

・現在の心境

「親父が死んだ後，本当に苦労した．食べ物はないし，お金はないし，人からいじめられるし．国からも，『お前たちは反動分子の子どもだ』と言われた．しかし二二八事件による影響は，僕は気にしていない．運命として諦めている．二二八事件がなかったら，僕はこの人生ではないだろう．しかし，事実こうだから，僕は自分で運命として諦めてるんだ．運命と諦めて，自分なりの道を歩むのが僕の人生だと…」．

7.　調査学生の感想と総括

7.1　調査学生の感想

調査に参加した学部生はどういう知識を吸収し，どのように変化したのであろうか．学生の報告書から，主な感想を列記する．

・　受難者８名の家族の証言を集めることができた．さらに，「特集・台湾二二八事件」として学内評論雑誌刊行までこぎつけた．ルポルタージュ形式で書くことによって，想定される読者である学生にとっても，等身大で読める書籍となったと考える．

・　2014年12月末に刊行された中央評論289号を，台北二二八紀念館と二二八國家紀念館へ25冊ずつ計50冊を配布した．両紀念館では今後，来館した日本人観光客に中央評論を無料配布して頂けることとなった．中国語・台湾語への翻訳も現在検討中とのこと．本来なら中央大学の生協でしか購入できず，読者が限定されてしまうが，大学関係者以外の人々に読んで頂く機会が増えた．特に，台北二二八紀念館は台北駅からも近く，今後，日本人観光客にも中央評論を読んでもらえるきっかけになると思う．

・　台北二二八紀念館と二二八國家紀念館に協力して頂き，資料集めや事件の勉強もはかどり，同事件について理解を深めることができた．日本統治下の影は，まだ台湾に強く残っていることを実感した．歴史といっても，過去だけのものではなく，現在につながり，未来につながっているものだという認識を持った．日本と台湾の歴史，そして，日本の敗戦後に台湾で何が起

きたのかについて，林連宗さんの大学の後輩として，これから記憶をつないでいきたい．

・　８名の受難者遺族の証言を通し，事件当時を生きた人々の傷は深いと知った．積極的に事件の証言を伝えていきたいという人は少なく，「辛い記憶を思い出したくない」と考える遺族が多かった．しかし，遺族の方々は取材の最後には「日本から二二八事件の調査で訪ねてくれたことは嬉しい．心のどこかで私たち遺族の心境を理解してほしいという気持ちもある」と仰しゃっていた．遺族の全員がそうであるとは決して思わないが，私たち日本人が彼らの境遇や心境を知り，二二八事件への理解を深めることは，多少なりとも遺族の方々の心の支えになるのではと感じた．

・　遺族の方の中では，今もまだ戦いと悲しみが続いていることを強く感じた．特に林信貞さんの場合は，遺体が帰ってこないどころか，父親の林蓮宗さんが連れ去られた理由すら未だにご家族の方に正式に伝えられていないのが現実．これほど強く『真実を知りたい』と求めている人に話を聞いたのは，私にとって初めての経験だった．

・　台湾への日本人旅行者が年々増える一方，日本では二二八事件について語られることはほとんどない．何故，台湾は親日で知られているのか．その根幹には二二八事件が大きく関係しているということを今回の取材で間接的にでも学ぶことができたのは大きな収穫であった．日本人は台湾を「日本人に対して友好的であり，日本語を話せる人々が多いので旅行がしやすい」という印象から，歴史的認識へと，もう一歩前進させる必要がある．「国民党統治があまりにも劣悪であったため，日本統治の方がまだましだった」という意識が現在の70代以上の台湾住民に定着し，それが子や孫へ代々引き継がれていったと考えられる．そのため反日感情を抱いている台湾の人々は少ないのだ，ということが分かってよかった．台湾人の親日感情と二二八事件は，表裏一体の密接な関係にあったのだ．

・　調査を進めていく中で，台湾でも二二八事件の記憶が段々と風化していることを肌で感じた．陳木晉さんと張良澤さんへの取材で通訳を務めてもらった現地の通訳はどちらも20代後半であったが，「歴史の授業で少し触れられているだけで，実情はあまり知らない」と話した．張良澤さん取材の通訳士は，本取材で初めて受難者遺族の話を聴いたとも語った．若者の二二八事件への認知度が低下している以外に，受難者やその遺族が年々減っている．許壬辰氏（拓殖大学卒業の受難者）の妻・林玉英さんに2013年２月に連絡をとり，2013年９月に取材したい旨を伝え，承諾して頂いた．しかし，８月に再度連絡をした際，林玉英さんは既に亡くなったと知らされた．娘さんに事件について伺ったが，幼すぎて何も覚えていないとのことだった．わずか数カ月のうちに他界されてしまうとは想定しておらず，二二八事件の風化を身を以て感じた．そのため書籍などで証言を記録する活動は急務であり，これからも継続していかなければならないと実感した．余力があれば中央大学出身以外の受難者遺族の証言を集め，学内誌ではなく一冊の書籍として発行してみたい．

・　何より感じたのは，犠牲になった家族にとって，二二八事件は終わっていないということ．李榮昌さんは終始，事件の内部文書や真実を公開しない政府に対し，怒りをあらわにしていた．これが，日本統治が終了した後に起きた二二八事件の犠牲者の生の叫び声なんだなと感じた．李さんの『日本は何もしてくれなかったじゃないか』という言葉が，心に突き刺さった．そして，取材をしていて，何より感じたのは，証言者がとにかく高齢であるということ．今，早く聞いて記録して，若い世代につないでいかなくてはいけない，そう強く思った．さらに，

台湾に対するイメージも変わった．取材前の私のイメージでは，台湾はとにかく中国色だった．しかし，今回の取材で，台湾はとても複雑な色をしていることがわかった．染められてばかりで，ぐちゃぐちゃになった色．そして，すごく明るくて，活気があるけれども，どこか寂しい色をしている．そんなイメージだ．

・　赤色テロとは聞いたことがあったが，白色テロというのは初めて聞いた．１党独裁というのは，右だろうが左だろうが，あるいは革新だろうが保守だろうが，非常に極端で怖いものであることを知った．意見の多様性を認めない．反対する学生や市民は弾圧する．緑島という監獄島に収容し拷問し処刑する．二二八事件以降も，台湾人への弾圧が密かに続いていたことは，まったく知らなかった．日本の50年に渡る植民地統治，そして日本の敗戦と中国国民党による占領と統治，二二八事件．日本は台湾に対して，歴史的に大きな影響を与えたことを，改めて知った．

・　台湾といえば，小籠包，映画の舞台にもなった九份ぐらいしか知らなかった．自分の夫，父親が，ある日突然，憲兵隊に連行され，そして行方不明になる．「運命なんです．運命と思わなければ，頭がおかしくなります．だから，運命とあきらめているのです」という受難者家族たちの声を聴いて，心が苦しくなった．歴史的事実とは，これほど辛いものなのか．まったく知らなかった自分が，恥ずかしい．取材活動で，とても貴重なものを得たし，自分が大きく成長した．確実に大人になったと思う．

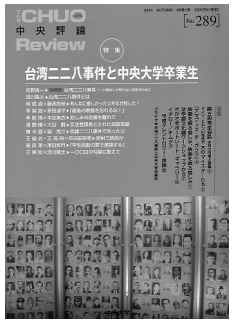

写真24　『中央評論』〔2014年秋号 no. 289〕の表紙．

7.2　プロジェクトの総括

台湾二二八事件で，多くの中央大学の卒業生が受難していた歴史的事実は，これまであまり知られていなかった．本プロジェクトは，中央大学の現役学生が卒業生の受難者家族を取材し，ルポルタージュの方法を使って事件の本質に迫ろうと企画したものである．企画段階で，事件から68年も経っており，受難者家族を探し出すことは容易ではなかった．しかし，様々なルートを使って，８人の受難者の家族を見つけ出し証言を記録することができた．本プロジェクトは，台湾の新聞である「自由時報」「Taipei Times」にも掲載され，外部からも高い評価を受けた．

受難した卒業生の家族の貴重な証言を記録することができたことが，最も大きな成果である．しかし，それだけではない．学生たちの感想を一部紹介したが，その中からも，① 日本と台湾の歴史的関係，② 本省人と外省人の対立の根幹，③ 国民党と民進党の対立の根幹，④ 白色テロから美麗島事件，台湾太陽花運動との関係，などについても考察を深めることができたことが分かる．以上の点で，同プロジェクトの成果は，高く評価できるものと考える．

注

1）　本調査については，中央大学 FLP ジャーナリズムプログラム演習 ABC 履修者の協力を得た．特に，澤田紫門君（総合政策学部卒業，現在朝日新聞記者）には，スケジュール管理，受難者リスト作成，調査者の手配，調査対象者との交渉，報告書の作成などの事務作業を担当してもらった．また，調査にあたっては，台北二二八紀念館，二二八國家紀念館，高雄市立歴史博物館，台湾二二八關懐聰会，二二八事件紀念基金會の協力を得た．

2）　本調査研究と分析には，2014年度中央大学特定課題研究費の補助を受けた．

3) 本稿は各受難者家族へのインタビューの概要である．詳細については，『中央評論』〔2014年秋号 no. 289〕でルポルタージュ特集を組ませていただいた．本稿と合わせて，ご購読いただければ幸いである．

4) 本来なら「占領」であるが，中国国民党からすれば「接収」となる．

参考文献

浅野和生（2010）『台湾の歴史と日台関係』早稲田出版

王育徳・宗像隆幸（1990）『新しい台湾―独立への歴史と未来図』弘文社

喜安幸夫（1997）『台湾の歴史』原書房

阮美姝（原作・監修），張瑞廷（画）（2008）『漫画台湾二二八事件』まどか書房

高傳棋（編）（2008）『台北放送局暨　台湾廣播電台特展專輯』台北市政府文化局・台北二二八紀念館

史明（1991）『台湾は中国の一部にあらず』現代企画室

謝英從，林品貝（2011）（編集実務）『台北二二八記念館の常設展示特集』台北市政府文化局・台北二二八紀念館

周婉窈（2013）『増補版図説台湾の歴史』濱嶋敦俊，石川豪，中西美貴，中村平訳，平凡社

ジョン・H・カー（2006）『裏切られた台湾』蕭成美訳，同時代社

張徳水（1992）『激動！台湾の歴史は語りつづける』雄山閣出版

陳銘城，蔡宏明，張宜君（2012）『槍口下的司法天平―二二八法界受難事蹟』財團法人二二八事件紀念基金會・中華民國律師公會全國聯合會

丸川哲史（2010）『台湾ナショナリズム』講談社